第13課　福音と教会

【暗唱聖句】

「ですから、今、時のある間に、すべての人に対して、特に信仰によって家族になった人々に対して、善を行いましょう」ガラテヤ6:10

【今週のテーマ】

【日曜日・罪に陥った人立ち帰らせる】

「兄弟たち、万一だれかが不注意にも何かの罪に陥ったなら、“霊”に導かれて生きているあなたがたは、そういう人を柔和な心で正しい道に立ち帰らせなさい。あなた自身も誘惑されないように、自分に気をつけなさい」ガラテヤ6:1

罪に陥ってしまった友や兄弟姉妹がいたときどのように対処すればよいのかパウロはアドバイスしています。まず、言葉に関してですが、罪に陥るというギリシャ語は、罪に捕らえられるという意味のある言葉です。すなわち、自分の力では抜け出せなくなっているような状態です。ただ、罪という言葉は、意図的に犯す罪ではなく、「不注意にも」という言葉があるように、歩んでいる道を知らず知らずのうちに踏み外してしまっている状態と理解することができます。このような状態においては、教会においては処罰や除名とするのではなく、神様に立ち帰らせるようにすることが大切だと教えています。立ち帰るという言葉は、修復する、整理整頓する、手入れするという意味のギリシャ語です。わたしたちは彼らを見捨てるのではなく、神様から離れてしまっている状態にあることを気づかせ、優しく元の状態へと修復、あるいは癒してあげることが大切です。

　また、この正しい道に帰らせることができるのは、霊に導かれて生きている人です。わたしたちは愛する人を本当に主に立ち帰らせたいのなら、霊に導かれて生きていなければなりません。しかも、その上で決して裁くのではなく、柔和な心で接していかなければなりません。さらに「自身も誘惑されないように、自分に気をつけなさい」とパウロは勧告しています。ミイラとりがミイラにならないようにということです。

【月曜日・誘惑に注意する】

「…あなた自身も誘惑されないように、自分に気をつけなさい」ガラテヤ6:1

「気を付けなさい」とは、「警戒する」「注意を払う」という意味の言葉が使われています。不意に襲ってくる攻撃に備えておかなければならないということです。しかも、前半では「兄弟たち」と複数形で書かれてありますが、ここでは「あなたは」と単数形になっていることから、それは教会全体に対するメッセージというよりも、一人ひとりに向けたメッセージであることがわかります。　イエスキリストは誘惑に陥らないための秘訣について教えてくださいました。それは祈ることです。

「誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」マタイ26:41

どのような祈りであれ、祈ることによって私たちはその瞬間、神様と私たちはつながることができます。神様から引き離すことが悪魔の誘惑の目的ですので、祈ることによって神様に近づけば、誘惑にも勝利することができるということになります。どれだけ聖書のみ言葉に精通していたとしても、祈りがおろそかになると誘惑に負けてしまいます。パウロは「警戒しなさい」という強い言葉で誘惑に負けないように警告しているわけですが、言い換えれば、「祈りなさい」と言っているのと同じです。意志力だけでは誘惑に勝つことはできません。

また、パウロが警告している誘惑は道徳的な問題だけでなく、高慢の罪に対しても語っています。

「5:26 うぬぼれて、互いに挑み合ったり、ねたみ合ったりするのはやめましょう」ガラテヤ5:26

「うぬぼれ」とは、霊的高慢のことです。自分は霊的に優れている、だから罪を犯すことはないとうぬぼれることは大きな危険です。ダビデはナタンから「罪を犯したのはあなただ」と指摘されるまで、自分以外の誰かのことだと思っていました。また、うぬぼれから、他の人と「挑み合ったり、ねたみ合ったりする」のも愚かなことです。

【火曜日・重荷を担う】

「互いに重荷を担いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです」ガラテヤ6:2

「めいめいが、自分の重荷を担うべきです」ガラテヤ6:5

パウロは罪に陥った兄弟を神に立ち返らせる働き、誘惑に気を付けることという2つの指示のほかに、信者が抱えている重荷を担うことについても語っています。この「重荷」と訳されているギリシャ語は「バロス」と言い、文字通りの意味は誰かが運ばなければならない重たい荷物のことを指します。しかし、徐々にあらゆる種類の苦しみや困難をさす比喩として用いられるようになりました。

この重荷に関してパウロは「互いに重荷を担いあう」ことと、「自分の重荷を担うべきである」ことの2通りについて語っていますが、いずれにしてもクリスチャンは大なり小なり重荷を抱えているということをまず認める必要があります。これは説明するまでもないことですが、クリスチャンになって救われて自由になったからといって重荷が全く無くなるわけではありません。

　では、わたしたちはめいめい自分で担うことを神が求めておられる重荷と、互いに担い合うことを求めておられる重荷と、どのような違いや目的があるのでしょうか。

まず自分の重荷を担うことによって、わたしたちは「責任を果たす」ことの大切さを学びます。クリスチャンは無責任であってはなりません。また、それ以上に重要なのは、自分の重荷を通して神に頼る、神に委ねることを学ばせるために、めいめいが負うべき重荷を主は許しておられるということです。重荷を負うことによって、わたしたちは霊的に成長することができます。具体的には神に重荷下すということを学ぶことによって、本当の信仰を学ぶのです。

また、互いの重荷を担い合うことによって、わたしたちは愛を学びます。神の慰めを表すことを学びます。同時に重荷を持ってもらう側は自分を低くすることを学び、兄弟姉妹に対する感謝が生まれます。このように普通好ましいものではない重荷には大切な目的と意味があるのです。

【水曜日・キリストの律法】

「互いに重荷を担いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです」ガラテヤ6:2

パウロは互いに重荷を担いことによって律法を全うすることになると教えています。なぜかというと、互いの重荷を担うということは、愛にほかならず、愛こそ律法を全うするものだからです。ところで、「キリストの律法」と表現している箇所はここだけであるころから、シナイ山で与えられた十戒とは異なる律法のことを言っている主張する人もいるようですが、それは正しくありません。十戒も結局のところキリストが与えられたものであるからです。

また、火曜日にも学んだ「互いに重荷を担う」ことと、「めいめいが自分の重荷を担うべき」ことの二つの違いについてですが、実は、「重荷」と訳されたギリシャ語が両者では異なっています。前者の「バロス」は重い荷物を表す言葉ですが、後者の「フォルティオン」という言葉は、船荷や兵士の荷物を表す言葉であるのと同時に、子宮の中の胎児を表す言葉でもあります。船荷や兵士の荷物は人に持ってもらうこともできますが、子宮の中の胎児は自分しか運ぶことができません。そのような類のめいめいが担うしかない重荷もあるということをパウロは言っているわけです。そして、その重荷は人ではなく、神だけに担ってもらうことができるのです。

【木曜日・まくことと刈り取ること】

「思い違いをしてはいけません。神は、人から侮られることはありません。人は、自分の蒔いたものを、また刈り取ることになるのです」ガラテヤ6:7

神を軽く見てはなりません。罪を犯しても何でも許してくださるのだから、何をやっても構わないと考えることは大きな誤りです。少なくともわたしたちは自分が蒔いたものを刈り取ることになります。つまり、何かを行えば、必ずその結果が伴うということです。「自分の肉に蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、霊に蒔く者は、霊から永遠の命を刈り取ります」（ガラテヤ6:8）にあるように、もし肉、すなわち罪を犯したなら、その結果である滅びを刈り取ることになります。心から神に悔い改めるならば確かに赦されますが、この地上におけるその犯した罪の結果から神が必ずしも救いだしてくださるわけではありません。それに対して、霊的な行いをすればその実りである永遠の命を刈り取ることになります。だから、どのように生きるかが問われるのです。パウロはこう続けます。

「ですから、今、時のある間に、すべての人に対して、特に信仰によって家族になった人々に対して、善を行いましょう」ガラテヤ6:10

わたしたちはいつまで命が続くのかわかりません。だから、教会の兄弟姉妹同士、仲良く、互いに善を行うようにとパウロは言います。後悔することのない日々でありたいものです。ある方は毎朝仕事に出かける前に、玄関に貼った次の三つの言葉を読んでから出かけるそうです。

１もし、今日が人生最後の日だったら、今日やろうとしていることは本当にやりたいことか？

２もし、今日が人生最後の日だったら、今悩んでいることや苛立っていることを気にするだろうか？

３もし、今日が人生最後の日だったら、今日自分が出会う人にどう接するだろうか？